

## ミス・コンテストにおける聴覚障害女性

吉田 仁美

### Hearing Impaired Women in Miss Contests

YOSHIDA Hitomi

本稿では、1995年度のミス・アメリカに選出された、ヘザー・ホワイトストーン・マッカラム(Whitestone Mccallum, Heather) という米国の聴覚障害女性の物語を中心に描く。

本稿の目的は、第一に、彼女のミス・アメリカ獲得までの道りを文献等によって整理し、第二に、それによって、彼女の著作、行動や生き方が、聴覚障害や女性学の世界にどのような影響を及ぼしたのかを考察することである。その際には筆者の学問領域でもある障害者福祉はもちろんのこと社会政策、ジェンダー視点も含めて考察を行う。

キーワード：聴覚障害女性 ミス・コンテスト ジェンダー

This report presents the story of a hearing-impaired woman in the United States, Heather Whitestone Mccallum, who was elected Miss America 1995.

This report summarizes her activities until winning the title of Miss America through a literature review. It also considers how her writings, behavior, and way of living influenced hearing-impaired persons and women's studies around the world. Considerations will include not only the issues of welfare for disabled persons, the author's field of study, but also social policy and the viewpoint of gender.

Key words: hearing impaired women, miss contests, gender

#### I. はじめに

私は今、1995年度のミス・アメリカ・コンテストで優勝した、ヘザー・ホワイトストーン・マッカラム(Whitestone Mccallum, Heather: 以下、ホワイトストーンと用いる) という米国の聴覚障害女性の物語を中心に描こうとしている。

彼女は、1973年2月に米国アラバマ州ドーサンで生まれ、16歳の時に、両親の離婚を受けてアラバマ州のバーミングハムに移住した。1歳の時に耳が聞こえなくなり、1991年に地元の高校を卒業後、ジャンクソンビル州立大学へ進学した。大学生の時に、ミス・アメリカ・コンテストに出場し、史上初の障害者による第70代ミス・アメリカを獲得した。

彼女がミス・アメリカの栄冠を手にした時、国境を

越えて多くのメディアが彼女の存在を取り上げた。本人及び本人の母親が執筆した本が米国で出版され、その後、米国の社会学研究者らによって彼女をあつかった本も出版されている。本稿でも取り上げるが、ホワイトストーンの母親が書いた本は、『ミス・アメリカは聞こえないー聴覚障害児を育てた母親の記録』というタイトルで2000年に邦訳、出版されている。また、ホワイトストーンが執筆した本はドイツ語にも翻訳されており、世界的にも影響が大きいことがわかる。これらの著作は、とりわけ世界の聴覚障害者、聴覚障害の団体に大きなインパクトを与えている。

ホワイトストーンがミス・アメリカ・コンテストに優勝して20年の歳月が経つ。筆者は何故に、このタイミングで彼女の存在を本稿で取り上げるのだろうか。

その理由は、米国のDeaf Women's Studiesをより深く知るために、ホワイトストーンは避けて通ることはできないと筆者自身が痛感したからである。というのも、米国のDeaf Women、すなわち、聴覚障害と女性に関連する文献や資料等に目を通すと、必ずと言ってよいほど、ホワイトストーンが存在に行き着く。Deaf Womenの問題は、米国でDeaf Studiesの一部として位置づけられていたが、Deaf がWomenであることから、Women's Studiesの発達している米国では、両者の結合の兆しがギャロデット大学でみられた(吉田2010)。ギャロデット大学では学部学生にDeaf Women's Studiesの講義が開講されている。その講義内容でホワイトストーンが取り上げられていることを筆者は研究の過程で知った。従って現段階で、聴覚障害と女性学、障害とジェンダーの研究を続ける意味でも彼女のこれまでの軌跡を筆者なりに整理する意義はあるのではないかと考えた。

そこで、本稿の目的は、第一に、ホワイトストーンのみス・アメリカ獲得までの道のりを整理し、第二に、それによって、ホワイトストーンの著作、行動や生き方が、聴覚障害や女性学の世界にどのような影響を及ぼしたのかを考察することである。その際には筆者の学問領域でもある障害者福祉はもちろんのこと社会政策、ジェンダー視点も含めて考察を行う。研究方法は、ホワイトストーンや彼女の母親による著作、出版物、そして彼女をとりあつかった研究書等の文献レビューが主となる。できれば、彼女の足跡を追って、ホワイトストーン本人及び彼女を取り巻く人物、そして関わった団体へのインタビューを実施したいと考えていたが、筆者自身の事情でそのことができないでいる。したがって、本稿は、紙幅の都合もあるが、現在の筆者の手に負える範囲でのまとめになることをあらかじめお断りしておきたい。

## II. ホワイトストーンの誕生からミス・アメリカ優勝までの道のり

ホワイトストーンの生い立ち、そして、ミス・アメリカまでの道のりについては、Gray (1995 高村監修 高村・瀧澤訳2000)、Whitstone (1997)、Whitstone (1999)、Whitstone & Hunt (2003) によって確認されるので、以下それに依拠して叙述する。

冒頭で触れたように、彼女は、1973年に米国アラバマ州ドーサンで生まれ、生後18ヶ月の時にインフル

エンザに罹患し、その副作用によって耳が聞こえなくなる。ホワイトストーンの母親は娘が重度の聴覚障害と診断されてからすぐに彼女に合う補聴器を見つけ、さらに、娘に合う教育を求めて米国の各地の施設・教育機関、大学等を訪問した。母親は当時、住んでいたドーサンには聴覚障害児のための教育・訓練プログラムがないことを知り、地元でロビー活動を実施し、聴覚障害児の教育プログラムを立ち上げた。こうした体験を経て、ホワイトストーンの母親は、1976年の夏、様々な教育の選択肢の中から、口話法のひとつである「アクーベディック法」を採用する。アクーベディック法とは、聴覚法とも言われ、米国のコロラド州デンバーで開発された手法である。残存聴覚を組織的かつ最大限に活用する方法として知られている。一般的に聴覚障害児の親の多くは、子どもの教育の選択について、読唇を使った口話法か手話での教育方法のどちらかを選択するかで悩む。ホワイトストーンの母親も例外ではなかった。当時の様子を、以下のように語る。「私のきもちは、口話法のグループに傾いていた。ホワイトストーンが聴者の世界、家族と同じ世界で生きていくためには、口話力を身につけなければならない。口話法だけが、聴者の社会で暮らしていく唯一の方法だと思われた」と述べているように、ホワイトストーンがきこえる世界で生きていくことが母親にとっては前提としてあった(高村監修 高村・瀧澤訳2000, p.73=Gray 1995, p.70)。

その後、ホワイトストーンは、地元ドーサンで週2回アクーベディック法による口話訓練を受けることになる。加えて、親子で遠隔地の施設に出向き専門家による教育訓練を受け、母親自身も娘の教育のために、様々な情報を得ることを怠らなかつた。ホワイトストーンの母親は家庭での教育にも熱心で、自宅では単語カード等の教材を作るなど娘の言語能力を高めるために多くの時間を費やした。教育に時間をかけるために、母親はそれまで続けていた仕事を辞め、専業主婦となった。当然、家庭への負担、とりわけ経済的負担は積み重なる。経済的な負担をはじめ、家族への負担があまりに多く、長期化することに父親は嫌気がさし、結婚生活は破綻する。「(筆者注：米国において) 障害児をかかえる両親の離婚率は、非常に高い(高村監修 高村・瀧澤訳2000, p.155=Gray 1995, p.132)」とあるが、ホワイトストーンの両親も例外ではなかった。しかし、一方で母親は、「ヘザーの障害が、私たち夫婦を

結びつける絆になっていたこともたしかだった。ヘザーを育てることが、私たち夫婦の長年の努力の中心だったからこそ、夫婦のコミュニケーション、役割分担、譲りあい、尊敬などが保たれていた。ヘザーの障害がなければ、私たちはもっと早くに破綻していたはずである（高村監修 高村・瀧澤訳2000, p.155=Gray 1995, p.132）」と言う。この記述から、社会福祉・社会保障制度の不備が家族の負担になっている一方で、その不備を家族で補い合うことにより絆を深めることもできた側面もあったことが読み取れる。

1988年8月に離婚が成立し、ホワイトストーンと母親、そしてホワイトストーンの姉3人でバーミングハムに移住する。移住先のバーミングハムでは母親の実家の援助を受けながらの生活であった。家族からの援助には経済的な支援だけでなく、ホワイトストーンの学校の授業準備を何時間も手伝うといったことも含まれていた。その後、ホワイトストーンは転校先であるベリー高校を卒業し、ジャンクソンビル州立大学に入学することに決めた。この大学は聴覚障害者も多く、そうした学生たちへの支援も手厚かった。聴覚障害者のための通訳派遣制度をはじめ大学生活のあらゆる側面をサポートする体制も整っていた。

しかし、公立大学とはいえ、大学に入学するためには一定程度の経済力が不可欠である。ホワイトストーンの母親は学費を捻出するのが難しく、そのことに憂慮していた。その状況を知ったホワイトストーンの母親の知り合いが、「ジェファーソン郡ミス・ジュニア・スカラシップ・コンテスト」への出場を薦める。このコンテストで優勝すれば奨学金が手に入る……。そう考えたホワイトストーンと母親はコンテストの説明会に参加する。しかし、説明会終了後に出場資格がないことが分かり、一度はあきらめたものの、これを契機に、別の地域の「ミス・ジュニア・スカラシップ・コンテスト」へ出場する決意を固める。ホワイトストーンはコンテストで特技のダンスを披露し、無事、入賞する。賞金は、翌年の大学の学費（金額にして1,400ドル）にあてられることになった。その結果、ホワイトストーンは希望通り、ジャンクソンビル州立大学へ進学する。そして、この大学でホワイトストーンは手話と本格的に接するようになる。

大学に入学し、1年生では珍しくミス・ジャンクソンビル州立大学のミス・コンテストで優勝して奨学金を得、引き続き、彼女はミス・アラバマ・コンテスト

においても入賞を経験する。これらのミス・コンテストにのぞむための準備には多くの時間、労力を費やした。というのもミス・コンテスト優勝者は女性のロール・モデルを提示することが役割の一つにあるので、コンテストの審査基準には、外見的要素だけでなく、個性や知性といった内面的要素も含まれる。これらは面接や特技披露で審査される。場合によっては、数週間拘束され、生活態度も厳しくチェックされることもある（Whitestone 1999）。ホワイトストーンは、審査基準をクリアするためにも、他の人（出場者のほとんどは聞こえる人である）より多くの時間を特技であるバレエの訓練はもちろんのこと、審査員の質問に答えるためのプレゼンテーションの準備に費した。母親もその準備に付き合い、その努力は聞こえる人の数倍以上だったのだらうということが、ホワイトストーンの自伝から読み取れる（Whitestone 1997; Whitestone 1999; Whitestone & Hunt 2003）。こうした練習の成果もあり、いくつもの試練を経て遂に第70代ミス・アメリカ・コンテストで優勝し、史上初の障害をもつミス・アメリカとして瞬く間に有名になった。今から20年前の1994年の夏のことだった。

### Ⅲ. 聴覚障害の世界に与えた影響

これまでホワイトストーンのミス・アメリカ獲得までの道のりについて述べてきた。ここでは、ホワイトストーンがミス・アメリカを獲得したことによって聴覚障害の世界にどのような影響を及ぼしたのかを主にスーザン・バーチ(Burch, Susan:以下、バーチと用いる)の論文を取り上げる。バーチは、ギャローデット大学教授で専門領域は歴史学と Deaf Women's Studiesである。以下、彼女の論文の引用がやや長くなるが、この論文はギャローデット大学の Deaf Women's Studies の講義でも取り上げられており、重要な記述だと思われる箇所がいくつかあるので、以下、筆者によって翻訳された文章をもとに述べる。なお、邦訳の責任は筆者にある。

「(筆者邦訳) 1994年にホワイトストーンがミス・アメリカの栄冠に輝いたことは、ろう者社会に、そして彼女自身とろう文化活動家との間にも、大きな議論を巻き起こした。菌に衣着せぬ口話主義の支持者として、彼女は聴覚障害者の代表ではなく、例外として扱われた(筆者注: 傍点筆者)。彼女の『不可能はない(Anything is Possible)』式のマotto、そして克

服者のイメージは、一般社会で共鳴を引き起こし、彼女はミス・アメリカの中でも最も有名な1人になった(Burch 2006, p.255)。」

〔(筆者邦訳)(筆者注：ミス・アメリカ・コンテスト出場に際し)彼女の聴覚障害の『演技』は彼女の『何事も可能』主義をよく表している。最終種目のインタビューで彼女は、補聴器をつけて自らの聴覚障害を強調した。髪型もアップにまとめ、補聴器を強調した。この外見により、彼女は身体的な聴覚障害を認めつつ、文化的な聴覚障害からは距離を置いた。文化的な聴覚障害こそ、彼女は本当の障害と見なした。なぜなら、文化的な聴覚障害は、一般社会との違いを際立たせ、分離させているからである(筆者注：傍点筆者)。この興味深い演出は、障害と通常性という概念に関する伝統的な聴覚障害の文化の戦略に、大小さまざまな波紋を引き起こした。しかし、多くの同時代の聴覚障害者にとって、ホワイトストーン『克服主義』は行き過ぎだった。その年の『デフ・ライフ』誌の調査は、読者層の55%はホワイトストーンが聴覚障害者の意見を代弁していないと答えた。〕

別な記事では、ある聴覚障害者のソーシャル・ワーカーが、最初は、彼女の同僚たちもホワイトストーンの勝利を祝福したと証言している。『聴覚障害者が一般社会で認められるのを目撃することは、常に嬉しい』とコメントしている。記事は以下に続く。『この種の成功は、人々に勇気を与える。障害は、美しさや優美さ、そして成功の妨げには必ずしもならない。障害をもち、なおかつ“完全”、理想に達することは可能である。』

しかし、彼女は文化的な聴覚障害者の社会では理想ではなかった。そして人々は彼女が、彼らの『代弁』をすることを拒絶した。(中略)(筆者注：ホワイトストーンが)一般社会に『同化』した。この場合の『同化』は、皮肉にも、特別な存在になることで達成された。特別な存在になることで、ある意味『外部』にまつりあげられ、逆説的な意味で、『同化』したのである。彼女らの障害、そして文化的な観点から見れば、聴覚障害は、彼女たちの卓越性の飾りとして以外には、不可視である。彼女らは、実際、一般社会から見た理想の聴覚者女性像なのだ(Burch 2006, p.256-257)。」と指摘するように、ホワイトストーンの評価は、聴覚障害者と非聴覚障害者では大きく異なる。すなわち、聴覚障害者からは批判の対象、非聴覚障害者からは賞賛

の対象とみなされた。では、(どちらかというところろ文化に価値をおく)聴覚障害者に受け入れられるコンテスト優勝者とはどういうモデルなのだろうか。バーチの文献に登場する1995年度の聴覚障害者に限定したミス・コンテスト優勝者であるモーリン・イエイツ(Yates, Maureen:以下、イエイツと用いる)の例を見てみよう。イエイツは、ホワイトストーンがミス・アメリカに優勝した年度と同じく1995年度にミス・デフ・アメリカで優勝している。

〔(筆者邦訳) ホワイトストーンに対する紙面上の、そして文化的な対比として、同じく1994年発行の『デフ・ライフ』誌では、同年にミス・デフ・アメリカに輝いたモーリン・イエイツの独占インタビューを掲載した。ろう者の両親の間に生まれたろう者で、金髪で痩せ気味のイエイツは、現代的な聴覚障害者の文化的理想像を体現していた。ろう学校に通い、手話を体得し、聴覚障害者同士のスポーツイベントやクラブに参加していた。インタビューが掲載される2ヶ月前には、イエイツは『ろう(Deaf)を誇る』と題された記事に合せて、『自由』を意味する手話のポーズで『ニューヨーク・タイムズ・マガジン』誌の表紙を飾っていた。ろう者の中が極めて心地いいと語る彼女は、『インクルージョン』を、『聴覚障害者のためにろう者を学校で演じること』、『耳がきこえないような環境でろう者になること』と定義しなおした。しかし、ホワイトストーンや他のミス・コンテスト優勝者と同様、イエイツは全ての聴覚障害者が協調して調和と寛容を保つ必要性を強調した(Burch 2006, p.257)〕

イエイツは、ろう者としての強固なアイデンティティを保つために、きこえる世界を拒絶し、距離をおいているように筆者にはうかがえる。この点がホワイトストーンと大きく異なる。

そして、ミス・アメリカを獲得したホワイトストーンが聴覚障害の世界に及ぼした影響はどのようなものか。

〔(筆者邦訳) ホワイトストーンによって体現された聴覚障害者のイメージ(従順、口話主義、同化)に対する今日の激しい抵抗は、文化的な聴覚障害の明示された観念における重要な進化を示している。デフ・コミュニティが一般社会からの押し付けに完全に譲ることは一度もなかったにせよ、以前のコミュニティの戦略や態度には一般社会の価値観を取り込み共有する傾向があった。現在においては、聴覚障害者は自身の

社会言語的アイデンティティを称賛し、文化的同化に対して、より断固に抵抗するようになった (Burch 2006, p.257)。」

当初、ホワイトストーンは、聴覚障害者に勇気を与えたいという思いの一心で、ミス・コンテストに出場した (Whitestone 1997)。しかし、ホワイトストーンの前想に反して、ミス・コンテスト後に大きな批判を特に聴覚障害者側から受けることになる。当然、ホワイトストーンへの嫉妬もかなりの部分を占めたのだろうが、それ以上にアイデンティティの違いによる文化的な背景が聴覚障害者からの反発を引き起こした。

聴覚障害の世界において、アイデンティティは重要な概念を持つ。それは、聞こえる世界と聞こえない世界のどちらに立脚点を置くかによって異なる。ホワイトストーンの場合、人生の大部分を聞こえる世界で過ごし、読唇術、口話法をコミュニケーション手段として身につけた。彼女は手話にも接したが、彼女が身につけた手話はSEE<sup>1</sup> (言語対应手話) で、米国のろう者の言語であるといわれるASL<sup>2</sup>とは異なっていた。そのため、特にASLを使用する聴覚障害者から批判の対象となった。それ以来、ホワイトストーンは、聴覚障害の世界とは距離を置くようになる。

#### IV. ミス・コンテストと聴覚障害女性—ジェンダーの視点から

ミス・コンテストは、1960年代の米国のウィメンズ・リブの運動の中で批判の対象となって以来、常にフェミニストたちの攻撃的となってきた (吉澤2005, pp59-71)。そして、ミス・コンテストそのものが、身体障害者差別につながるという当事者からの批判運動もあった (井上 2001, pp.145-146)。このことについては、バーチも同様の指摘をしている。しかし、身体障害の種類の中でも聴覚障害者の内部でミス・コンテストへの批判は起きていないという。一体、なぜなのか。この問いに、バーチは以下のように答えている。

「(筆者邦訳) 米国の一般社会ではもはや盛んと言ってよく、少数民族内でも急増している美人コンテストに対する批判は、聴覚障害者の間ではまったく起こっていない。聴覚障害者のコミュニティが一般社会での存在価値の拡大を誇っても、彼らは『私たちの社会が女性に対して持っている中でも、最も伝統的で保守的な態度を、聴覚障害によるコミュニケーションの障壁故に』未だに保持している。これらの障壁は聴覚障害

を有する女性の地位を複数のレベルでおとしましている (筆者注：傍点筆者)。主に言葉の違い、そして関連する健聴者側の聴覚障害者に対する誤解によって、聴覚障害者の女性と健聴者の女性の交流はまれである。壁が大きい聴覚障害者の女性は一般社会との交流にはあまり参加しない。これによって、ジェンダーや女性が抱える様々な問題について意見や経験を交換する機会が制限されている。さらに、言語の障壁がリテラシーや教育に影響を及ぼすことは、この本に収録されている他の論文が証言している。多くの聴覚障害者の女性は、その制限された読解力のために、学術分野や活動サークルで急増している高度なフェミニズム評論を手にとることがより困難である可能性がある。同様に、ラジオ、テレビ、映画等に対して歴史的に接触が不可能であったために、聴覚障害者の女性が、ジェンダー、権力、アイデンティティに関する多様な考えに触れることを制限してきた (筆者注：傍点筆者)。聴覚障害者社会内部における女性の立場を内部で再評価することを妨げている他の要因も存在する。例えば、聴覚障害者の『外部』から受ける批判は、コミュニティ内の特定の問題に対してではなく、コミュニティ全体に対する攻撃として受け止められる。これは多数のマイノリティ集団内で共通する反応であるが、健聴者の一般人による連続的な抑圧と差別の経験から、強く表れているのかもしれない。その上、彼らにとって抑圧者だった一般の健聴者による聴覚障害者の文化と能力への直接的な認識と支援活動はほんの最近のことではなく、1988年のDPN (筆者注：Deaf President Now) 運動<sup>3</sup>が最初にして最も顕著である。もしかしたら『外部』からやってくる女性論者や同様の評論家は、未だ急進的すぎるように思われ、聴覚能力に対する広い差別と未だに戦っている人々を脅かしているのかもしれない。聴覚障害者は、男性も女性も、聴覚障害を持つ身体を欠陥や依存的と見なす考えを長らく拒絶してきた。(中略) 絶大な人気で、軽薄でキツク聴覚障害のミス・コンテストは、このマイナー文化の破壊的なまでの保守性と、その内部で、不確かでありまいな聴覚障害者の女性の立場を端的に示している (Burch2006, pp.257-258)。」

バーチの指摘から、聴覚障害女性の内部においてミス・コンテスト批判の議論が欠けていること、そして、ジェンダーの視点が欠けていることが読み取れる。この点についてバーチは、「女性の社会進出が進んでい

く中で、数十年もの間、聴覚障害者の内部での性差の変化は起きていない(Burch2006, p. 257)」と強調する。すなわち、(一般の)女性の社会進出が進んでいく中で、障害のある女性の地位は一向に上がらず、そしてその背景には、障害のある女性たちの意識、ジェンダーに関する知識が不足していることがある。

## V. さいごに

以上、述べてきたことをまとめると以下の3点になる。

第一に、ホワイトストーンのみス・アメリカの栄冠を手にするまでのプロセスについて、取り上げる。既述のように、ホワイトストーンのみス・コンテスト出場の契機には経済的な事情が背景にあった。ホワイトストーンの家は、母子家庭で、生活は苦しく、家計は常に“火の車”であった。そこで、生活費を軽減するために、ミス・コンテストに出場し、入賞して賞金を獲得し、授業料等を稼ぐ。ホワイトストーンの場合、学業とアルバイトの両立は困難であったので、ミス・コンテスト出場は数少ない選択肢のひとつだった。結果、様々なミス・コンテストに入賞し、米国のミス・コンテストの最高峰であるミス・アメリカ・コンテストで優勝し、史上初の障害者のミス・アメリカとして最も有名なミス・アメリカとして今でも多くの人の記憶に残っている。一方で、公的な支援、つまり社会保障や福祉制度の不備が彼女をミス・コンテスト出場への道を歩ませたのではないかと、という複雑な思いが筆者には残る。ホワイトストーンの家からの状況から、財源も、人材も、家族頼み、強いて言えば女性の側に、負担が偏っている状況が浮かびあがってくる。と同時に、一時的にはそれが家族の絆を深める要素になっていることも否定できない。

第二に、ホワイトストーンのみス・アメリカ優勝が聴覚障害の世界にどのような影響を及ぼしたのか、という点について取り上げる。これについては、インターネットでの情報はあふれるほどあるが、文献については限られており、今回はバーチの文献を主に取り上げた。バーチが指摘するように、ホワイトストーンは一般社会では賞賛の対象となったが、聴覚障害の世界には受け入れられなかった。これはインターネットでのいくつかの書き込みからも窺えた。これはホワイトストーンが聞こえる世界を中心に育てられたこと、その中で、アイデンティティを確立したことが背景にあ

る。ホワイトストーンは医学的な障害を認めながらも、聴覚障害の世界でみられる固有の文化、すなわち、ろう文化については否定的な見方をしている。ろう文化を支持する聴覚障害者の中には補聴器の装用を否定的に捉える人がいるが、ホワイトストーンは、補聴器や字幕、支援機器等の活用については肯定的に捉えている(Whitstone & Hunt 2003, p.177)。彼女の補聴器に対する肯定的な捉え方について、米国のろう者の一部から批判の対象となった一つの要因であった。補聴器を装用することで、聞こえる世界と聞こえない世界の二つの架け橋になりたいと思っていた彼女の希望も主張も、ろう者社会では徹底的に否定された(Whitstone 1997)。聴覚障害者にとってアイデンティティは重要な概念を持つが、時として、それが聴覚障害者の内部の亀裂を生み出す。そして、この深い亀裂は他の障害の種類にはあまり見られない。しかし、両者が歩み寄ることのできるようにはどうすればよいのだろうか。ろう文化に価値を置けろう者の主張と、ホワイトストーンのように聞こえる世界に身を置き、アイデンティティを築く聴覚障害者の主張は異なる点がいくつか見られる。この課題については、制度・政策の視点、ユニバーサル・デザイン、ソーシャル・インクルージョンといった理念も含めて長期的に取り組んでいきたい。

最後に、ミス・コンテストと聴覚障害者との関わり、ジェンダーの視点を取り上げる。既に述べたように、フェミニズムの世界で、そして一般市民の中においてもミス・コンテストは批判の対象として扱われ、ミス・コンテストの存在自体が女性差別であるとみなされてきた。しかし、聴覚障害者の内部でミス・コンテストは批判の対象とされてこなかった。この現象は米国だけでなく日本も同様である。現実に米国でも、日本でも、ろう者に限定したミス(あるいはミスター)・コンテストが各地で開催されている。これはおそらく、米国のミス・コンテストの影響、ホワイトストーンの影響が背景にあるのだろう。そして、一般に“声”や“舞台”を与えてこられなかった聴覚障害者向けの“舞台”を新たに用意する意味もあるのだろう。その存在意義について筆者は正面から否定するつもりはない。一方で、ミス・コンテストへの批判が聴覚障害者の内部で起きていないことから、フェミニズムやジェンダーに関する知識が聴覚障害の女性に不足していることを文献によって確認できた。この課題については、社会政策

とジェンダーの接点から、当事者のおかれた立場とアイデンティティの相違を考慮しながら、そして、時代の変化に対応しながら、慎重に研究を進めてゆきたい。

の可能性 ミネルヴァ書房  
吉澤夏子 2005 フェミニズムの困難—どうい  
う社会が平等なのか 勁草書房

## 注

1. SEE (Signing Exact/Essential Language) とは、口話英語をそのままの語順で逐語的に手話化したものである。
2. ASL (American Sign Language) とは、米国及びカナダで使用されている手話である。この手話は米国のろう文化、ろう者社会で指示されている。
3. DPN (Deaf President Now) 運動、すなわち、「今こそろうの学長を」求める運動とは、1988年3月6日から同月13日にかけてギャローデット大学で起こったろう者の学長の選出を求める運動のことである。この運動は全米の障害者団体に影響を及ぼし、またろう者社会とろう文化の存在を世間に認識させる契機ともなった。

## 引用文献

- Burch, Susan 2006 “Beautiful, though Deaf”: The Deaf American Beauty Pageant Brueggmann, Brenda Jo and Burch, Burch Women and Deafness Double Visions, Gallaudet University Press, pp.242–261.
- Gray, Daphne 2000 Yes, You can Heather: The Story of Heather Whitestone, Miss America 1995, Zondervan. 高村真理子監修／高村真理子・瀧澤亜紀訳 2000 ミス・アメリカは聞こえない—聴覚障害児を育てた母親の記録 径書房
- 井上芳保 2001 ルサンチマン型フェミニズムと解放のイメージ 江原由美子編 フェミニズムの主張, pp. 133–166.
- Whitestone, heather 1997 Listening with Your Heart, Doubleday
- Whitestone Mccallum, Heather 1999 Believing the promise: daily devotions for following your dreams, Doubleday
- Whitestone Mccallum, Heather & Hunt, Angela 2003 Let God Surprise You: Trust God with Your Dreams, Zondervan
- 吉田仁美 2010 高等教育における聴覚障害者の自立支援—ユニバーサル・インクルーシブデザイン